

星空凜は猫を被りたい

Kano

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

真姫による、凧をプロデュース大作戦。

凧の見た目も中身も女の子にするために真姫が一肌脱ぐお話。

概要に反して後半はシリアスなお話です。そっち系のお話はきつとありません。きつと。

少しsidの内容に触れている部分もありますのでご注意ください。

5 / 26 あとがきを活動報告に掲載しました。

目次

後編 中編 前編

16 9 1

前編

「え？ 真姫ちゃんが凜におしやれを教える？」

もう二学期も始まって一息が付き、秋分もとうに過ぎたある日のこと。かなり遅れてきた残暑によって、肌を刺すような日光を十二分に受けた放課後練習も終わったころ、クールダウン中に真姫ちゃんがそう言っただけで話しかけてきた。

「そうよ。あの日以来ちよつとは女の子らしい服装をするようになってるけれど、まだまだ女の子初心者でしょ？」

「女の子初心者って……。それだと凜が、今まで男の子だったみたいだにやー……」

「ち、ちがつ！ 凜はおしやれをし慣れてないって言いたいのよ！ とにかく、今週の土曜日って空いてる？ ショッピングに連れて行ってあげるわ」

今週の土曜日と言えば、テスト前最後の休日だ。つまりそれは凜にとって最後の砦を意味している。

「その日から凜は真面目に学業に励むつもりなんだにや」

「それっぽい言い方して、テスト勉強と言うより、要するにテスト前の課題を全然終わらせていないんでしょ？」

返す言葉が見つからなかった。

「ま、どうせそんなことだろうと思ったわ。だからショッピングが終わったら私の家に来ればいいのよ。私が着なくなったものとかもいろいろと試着させてみたいし、そのついでに課題も手伝ってあげる。二日もあれば終わるでしょ」

学年トップの真姫ちゃんが手伝ってくれるとなると百人力だ。提出期限当日になっても終わっていなかった時の頼みの綱として考えていたけれど、その前に終わらせられるとなるなら凜としては願ったり叶ったりである。……って、あれ？

「え？ 凜、真姫ちゃん家に泊まるの？」

「何か都合悪かったかしら？ 凜のことだから、土日を目いっぱい

課題に使う予定で開けているものだと思っただけだ」

心の中にある見えない的の、ど真ん中を射抜かれた気分になる。確かに凧は、土日の48時間をどのように効率よく使うかの計画まで練っていた。でも……。

「なんか先回りして言われると、腹が立つにや」

「ならそういうことでいいわね。朝の10時にUTX学院前で会いましよ。時間厳守でお願いね」

画して凧は、真姫ちゃんによって半ば強制的に、ほとんど上から視線で約束を漕ぎ着けられたのである。



「おはよ真姫ちゃん。早いね、待たせちゃったかな?」

シヨップピングの約束をした日が嘘だったかのような、暑さを感じない綺麗な秋晴れに恵まれた当日の朝。集合の時間になるかならないかの頃、凧は少し早く待ち合わせ場所に向かったものの、すでに真姫ちゃんはそこで待っていた。

「おはよ凧。私も今来たところよ。それより……ふむ」

「な、何かにや……?」

真姫ちゃんは顎に手を当て、凧のすぐそばまで顔をずいと寄せてきた。その距離の近さに凧は少し後退る。さっそく凧のファッションセンスのチェックということなんだろうか。真姫ちゃんは凧の周りを一周すると、納得したようにこつちを向いて笑顔を見せた。今日の服装は、まあいつもの服装と大して変わらないんだけど、上はクリム色のシャツで中に厚着を、下はブラウンのボーダー柄のオーバーオールにレギンスで肌は完全に隠している。

「ま、合格点つてどこかしら。おしやれとは言い難いけど、凧らしさは出ているわね」

それはどうも、と小さく返事をする、ようやく真姫ちゃんは凧から距離を取ってくれる。そんな真姫ちゃんの服装と言え、……うん、高そう。どこかで見たことあると思ったら、秋合宿の行きに来て

いた服装と、バッグから羽織っている白いコートまで同じだった。凧が人のことを言えた口じゃないけど、μ'sの中には他にもっとおしやれさんがいると思う。

「さ、こんなところで油を売っている時間はないの。早く行きましょう？ 凧のプロデュース大作戦、始めるわよ！」

その言葉に何かと反論したかったけど、真姫ちゃんはくるりと凧に背を向けると足早に駅へと向かって歩き出してしまった。

この二日間、凧は果たして無事でいられるのかな……。



電車に乗って向かった先は、都会の中の都会、原宿だった。普段かよちんどですら、ここまで遠出して買い物することもなく、目新しさに思わずきよろきよろとしてしまう。

「なに挙動不審になってんの。田舎者みたいに見えるから止めてよ。……つと、着いたわ。この店に入るわよ」

「凧はこれでも一応東京住みなんだけど……あ、待って」

店に入った途端、凧は思わずそこで立ち止まった。

「うわあー……！」

意図せずに感嘆の声が漏れてしまう。真姫ちゃんによって連れてこられたそこは、凧の知らない世界だった。せいぜい近くの大型ショッピングセンターにある服屋程度にしか行ったことのない凧にとって、その店の中はあまりにも眩しすぎた。

「別に、普通のアパレルショップでしょこんなの。……早く入りなさいよ」

固まっている凧をじつとりと見る真姫ちゃんの視線が痛い。これが普通と言われれば、凧はどうしようもなくなってしまう。

「り、凧には似合わないにゃー……」

「まーたそんなこと言って。あんなにばつちりとウエディングドレスを着こなした人が言うセリフかしら？ 今日凧に自信を付けさせる目的も含んでいるの。主役は主役らしく、しゃんとして頂戴」

真姫ちゃんはそう言って凜を軽く叱ると、店の奥に向かって手を振って声をかける。すると奥から出てきたのは、上下スーツに身を包んだ中年くらいのダンディーなおじさまだった。髪は半分くらい白んでいて、いわゆるちよび髭を鼻下に蓄えた彼はどこかの執事でもやっていそうだ。すぐに真姫ちゃん存在に気付くと、柔和な笑みを浮かべて凜たちのそばに来る。

「いらっしやいませ。これはこれは、西木野様のところの真姫お嬢さんではありませんか。おやおや、ご友人も一緒なのですね」

「今日は彼女の服を選びに来たの。手伝ってくれる?」

「もちろんでございます。早速見ていきましようか——」

そこから凜は、文字通り着せ替え人形だった。着ては脱がされ、脱がされては着てを繰り返し、真姫ちゃんはおじさまと、ああでもないこうでもない話し合いながら凜の服を選んでいく。最初は男性だからとおじさまのことを不安に思っていたが、真姫ちゃんよりもおじさまが勧める服のほうが候補として多く上がっていくのには驚いた。体を触ってもいないのに凜の体系を完全に把握していて、凜にぴったりの服を持ってきてくれる。

……何時間が経過したんだろう。そろそろ目が回りそうになってきた頃によくやく、遅めの昼食をと店の奥にあるカフェスペースに案内された。どうやら店がランチをこ馳走してくれるらしい。

「こんな高そうなお店、真姫ちゃんによく来るの?」

凜の一週間分の昼食代くらい値が張りそうなランチに舌鼓を打ちながら、丸いテーブルを挟んで正面に座る真姫ちゃんに尋ねてみた。

「季節の変わり目に来るくらいかしら? 家族ぐるみでお世話になってるから、来たときはこうやってランチをこ馳走してくれるのよ」

常連ならではの特典ということなのかな。それにしても気になっていたことが一つ。

「じゃあ真姫ちゃんの服はいつもおじさま……おほん、店員さんに選んでもらっているの?」

ファッションのことは先日真姫ちゃんに言われたように素人に等

しいのだけれど、そんな素人眼に見てもおじさまのセンスは凄く良い。凜の中ではどうしてもおじさまのチョイスが真姫ちゃんの私服に結びつかないのだ。

「いや、私って人に決められるのとかあまり好きじゃないのよね。服くらい自分で選べるものだし、いつもは一人で選んでるわ」

「そうなんだ……」

「なんでほっとしてるのよ」

「い、いや、気のせいだよ」

うっかり顔に出ていたようだ。せっかく連れてきてもらったのに、あまり失礼なことを考えるべきではないよね。

……そういえば、どうして真姫ちゃんはわざわざ凜のためにここまでしてくれるんだろう。こんな高そうなお店に……高そうな……高そうなの？

「に”やーーーーー!!!”」

「うえっ!! ななな、何よ突然! びっくりするじゃない!」

「あんな高そうな服を買えるほど、凜はお金を持ってないよ……」

「ああそんなこと」

椅子をひっくり返してまで驚いていた真姫ちゃんは凜の発言をそんなことの一言で片づけると、座り直して食後の珈琲を優雅にすつて見せた。

「私が払うに決まってるじゃない。こっちが勝手に選んで、さあお金を払ってなんて言うわけないでしょ」

「そんなの、申し訳なさいっぱいで、これから真姫ちゃんの顔を見るたびに赤面しちゃうにやー」

「なんで初恋の女の子みたいになってるのよ……」

眉間にしわを寄せ、真姫ちゃんが凜のことを見る。

「じゃあこうしますよ? 私はこの服で凜に先行投資をするわ。凜がこれから売れっ子アイドルになったら、そうね、私の服を買ってちょうだい」

「売れっ子アイドルって、メンバーの中でも断トツにかわいくない凜がなれるわけないよ……。それにスカウトさんも来てないのに

……あだっ！」

ダシッ！

と真姫ちゃんは凜の頭頂部をなかなかの力でチョップした。二人の騒ぎが聞こえているのか、扉の隙間から見える店内では他のお客さんが何事かとこちらを覗いているのがわかる。

「スカウトはこれからきつと、いや、絶対に来るわ！ ……まったく、凜ってやつぱり……うん。ま、お金はそういうことで、服の方をさっさと決めてしまいましょ」

何かを言いかけた真姫ちゃんは珈琲を一気に飲み干すと、凜を置いて店のほうに行ってしまった。

何を、言いかけたんだろう。



それからの時間はあっという間だった。昼食前にある程度絞っていた候補をもう一度着ながら、真姫ちゃんとおじさまと三人で一つのコーディネートへと絞り込む。

「さあ、出てきて凜」

選んでもらった服に着替えたものの試着室で渋っていた凜は、真姫ちゃんにその声を掛けられて恐る恐るカーテンを開ける。

「おお！ やつぱりこれが一番お似合いですな。凜お嬢さん、本当に素敵でございますよ」

そういつてにこやかに凜を見つめてくれるおじさまを見ると、なんとか試着室から足を踏み出す気になれる。

秋らしい少し深みかかった柿色のカットソーにはワンポイントで円形のブランドマークが入っていて、首回りからクリーム色のシャツを覗かせている。そしてその襟を通して胸元には焦げ茶の紐リボンがぶら下がっていた。下は膝上10センチ弱の淡い緑色をしたフレアの入ったスカートを履き、左前にちよこんと二つ蝶ネクタイのような赤いリボンが二つ付いている。さらにキャメル色のチャツカーブーツとグレイ基調のアーガイル柄靴下までおまけしてもらい、凜の

全身がそっくりそのまま完全にコーディネートされてしまった。

「どう？ 少しは自信がついたかしら？ しつかり鏡で自分を見てごらんさい」

肩を掴まれて試着室の鏡へと体ごと顔を向けられた凜は、否応なしに自分と対面してしまう。そこにいるのは確かに自分なのだけれど……。

「やっぱり凜はあんまりこういうお淑やかな服は似合わないよ……。ボーイッシュはボーイッシュらしく、もっと動きやすい格好がいいな」

「何言ってるのよ凜。あなたの今の姿を見て誰がボーイッシュだなんて言うのかしら。ねえ？」

「はい。それはそれはどこかのご令嬢のような、立派な淑女に見えますよ」

おじさまの後押しも受け自信満々に領いた真姫ちゃんは、財布の中から何やらカードを取り出す。高校生なのにもうクレジットカードなんて持っていることに驚きを隠せない。

「じゃあ私は会計してくるから、凜は出口で待っててね」

「う、うん。ごめんね真姫ちゃん。いつか必ず返すから」

「ごめんじゃなくて、ありがとうでしょ」

カードをひらつかせながら、真姫ちゃんはレジの方へ歩いて行つた。全身を着替えてしまった今、さっきまで来ていた服を持ち帰らなくてはならないことを思い出し、凜は慌てて試着室へ入ろうとする。すると、すぐ横でおじさまが大きめの茶袋を両手に抱えていた。

「着てきた服を持ち帰るのにお使いください」

「あ、どうもです。……今日はありがとうございました」

ペこりと頭を下げ、凜は壁に掛けていた自分の服を畳み始める。

「お店に来る前と今では、果たしてどちらが凜お嬢さんなのでしょうね」

「……へ？」

唐突に脈絡もないことを話しかけられて、振り返りながら素っ頓狂な声を上げてしまう。そこには凜が履いていた靴を箱に入れて抱え

ているおじさまがいた。この人、凄い。

「何を言っているのか、凜にはさっぱりわからないにや……？」

「これから言うことは年寄りの戯言として聞き流してください」

おじさまはそう前置きをすると、優しくほほえみながら諭すように話し出した。

「……凜お嬢さんも真姫お嬢さんも今、変化の多い多感な時期です。自分とはどういうものなのか、決して見失わないように」

「リーン？ 準備できたの？ 早く帰らないと、どんどん時間なくなるわよ」

お店の出口で真姫ちゃんが腕組みをして凜を待っている。すぐ行くと返事をした凜は、おじさまから靴を受け取り乱暴に茶袋に突っ込むと、もう一度深々とお辞儀をして真姫ちゃんの下へ向かう。聞き流せと言われたものの、おじさまの言葉は凜の心の片隅でぷらぷらと引っかかっていた。

おじさまが何を言っているのか、凜にはさっぱり、わからない。そうして凜のプロデュース大作戦はひとまず幕を下ろしたのだ。た。

中編

「ただいま。飲み物を持っていくわ。二階に上がってて？」

「お、おじやまします」

誰も居ない暗い家に明かりをつけていきながら、私は凧を二階の自分の部屋へと促した。お化け屋敷を探検するかのように身を縮めながら歩いていく凧だけど、扉の前にはネームプレートを掛けているから迷うことはないと思う。一人台所へ行き適当にジュースとグラスを盆に乗せると、そこでようやく一息付く。

「……ふう、やっと家に着いた」

ほんと凧だったら、私の予想以上に人の視線を集めるんだから、横にいる私が気疲れしてしまう。あれだけ可愛い子がにやあにやあ言いながらはしゃいでいたら、そりやあ人目にも付くわよね。挙げ句の果てには、最後に立ち寄ったカフェで後ろの人たちに同性カップル扱いされるし。

「カップル、か……」

カップル、彼女、ガールフレンド、アベック……って、これは古いか。私と凧がカップル……

「いやいやいや、ないないない」

邪念以外の何物でもないその考えを私は振り飛ばす。それこそ花陽のほうがお似合いじゃない、幼馴染だし。って、そういう話じゃないわ。

「真姫ちゃん！ 遅いにゃー！」

「わわわ……っ!!」

凧の声で我に帰る。あの店を出てからというものの、どうも調子がおかしい。急いで盆を持ち上げると、私は台所を出て階段を駆け上がった。

「おまたせ。適当にオレンジジュースを注いだけど、他に飲みたいものがあつたら……あつ」

部屋に居た凧は、机の上に飾ってあつた写真立てを手にしていた。あのファッションショーの時に撮った、ウエディングドレスに身を包

んだ凜とタキシード姿の私とのツーショット写真。

「真姫ちゃん……これ……」

「わーっ!!! 違うの! いや違うくないんだけど、そそそ、そう!

これは日替わりよ!」

「なるほど! つまり今日は凜の日ってことかにや! 凜がお泊ま

りする日だもんね!」

……どうにか誤魔化した。昨日で掃除は徹底したはずなのに、写真立ては盲点だったわ。深読みはされていないみたいだし、とりあえず安心してとこかしら。……安心? 何を?

「真姫ちゃんのベッド、ふつかふつかにやー! おー、枕から真姫ちゃんの匂いがする!」

「こ、こら凜! 埃が立つから止めて! 枕も返しなさい!」

凜の手から枕を奪い取った私は、ベッドの上で凜と対峙する。すると怪しい手の動きをさせながら凜が私に迫ってきた。希から体得したと思われるそれからは、確かな恐怖しか湧かない。

「ちよつと、いい加減にしないと課題見せてあげないわよ!」

「にやっ、それは困るにやー……」

耳があつたら垂れていそうなくらいしよんぼりとする凜。罪悪感に苛まれるけど、貞操を守る為ならそうも言つてられない。

「まずはお風呂に入って、そこから夕ご飯よ。その後に私のお古を幾つか試着してもらって、最後に勉強ね。いい?」



思いの外、凜が課題をやっていない範囲が多くて、試着を次の日に回し先に課題に取り掛かった。そして熱心に教えていたせいか、気付いた時には時計の針はとつくに頂点を過ぎていた。凜もうつらうつらと舟を漕ぎ始めたことだし、これ以上は効率が悪いと判断した私は、渋々と凜の欲求もとい要求を飲むことにする。

一発だけデコピンをかました後に、身悶える声を聞きながら敷布団を準備するために部屋を出た。客人用の寝室もあるにはあるのだが、

凜に対してはその選択をする必要がない。

両腕でなんとか抱えきれぬ程度の寝具一式を持って部屋に入ると、凜は既に私のベッドの中に潜り込んでいた。身動きをしていないあたり、もう寝ているのかもしれない。そんな凜をわざわざ起こさないように静かに布団を敷き始めると、しかし残念ながら彼女は起きてしまう。

「ごめん起こしちゃった？ もう用事はないから寝てていいわよ。ただし試着は明日の朝にするからね」

「違うにや。真姫ちゃんがベッドに入ってくるのを待ってたんだよ！ ほらはやくはやく！」

顔と片手だけを出した凜は、さながら招き猫のように私を呼ぶ。同じ布団で寝ることを予想していなかった私は、反応が追いつかずにきよとんとしてしまった。

「い、意味わかんない」

「せっかくお泊まりに来たのに、一緒に寝ないなんてあり得ないにや！ かよちゃんとはいつもそうしてるよー」

「……そう、花陽とはいってもそうしてるのね」

少しだけ、本当にほんの少しだけ、心の中にもやがかかったような気がして、私は押し黙ったままベッドの中に潜り込んだ。急に様子が変わった私を見て不安げな表情をする凜の頬を、両手でしっかりと抓る。

「あいだだだだだだだー」

涙目になる凜がとてつもなく可愛いけど、跡が付くと可哀想なのでほどほどで程々で手を放してあげる。

「ごめん、つい」

「つい、でほっぺを抓られたらたまったもんじゃないにや！ 凜怒ったよ！ もう寝るにやー！」

りすみたいに頬を膨らました凜は、そのまま私にそっぽを向いて寝てしまう。いちいち仕草が可愛くて思わず後ろから抱きしめたくなるのだけど、流石にそこは思い留まった。意思が固いのかそれとも本当に寝てしまったのか、凜は一向にこちらを向いてくれない。

ぼーっとしたまま十分程経った頃に、寝てしまつて聞こえなかったならそれでいいと、私は一つの質問を彼女に投げかけた。

「——凜の昔話が聞きたいな」

それは今回、凜を誘つた本当の目的。それはショッピングをして凜を飾り付けるのでもなく、家で凜の課題を手伝つてあげるのでもなく、ただこの質問をしたかっただけ。この質問の意味するところは、恐らく凜が一番知っていると思う。

「……………凜の昔話なんて、面白くないよ。…………それよりも真姫ちゃんの昔話を聞きたいにや」

背中を向けたまま、凜がそう言った。一見するとさっきの流れからただ不機嫌を示しているだけのように見えるけど、実際は違う。

「私が話したら、凜も教えてくれる？」

「だから凜の話なんて面白くもなんともないにや。幼稚園からかよちんと一緒にいて、小中と今みたいにいよいよ過ぎてきて、はい終わり！」

「もつと詳しく聞きたいのよ。なによ、せつかく丸一日お世話してあげたのに、少しぐらい付き合つてくれてもいいじゃない」

わざとらしくため息をついた私は、凜と同じように彼女から背を向けてみせる。話を聞き出すためとはいえ少し意地悪な仕打ちだけど、しかし背に腹は変えられない。誰に聞かれても話したがらない、凜の昔話。

「…………じゃあ、真姫ちゃんから教えてくれたら、仕方ないから話してあげる」

「そう？　なら話すわね。うふふ、お泊まりの醍醐味はやっぱりここからよね。まずは幼稚園から始めようかしら——」

あくまで軽い感じを出しながら、私は自分語りを始めた。小さい頃から複数の習い事に通わされて、友達が少なかったこと。それでもピアノだけは楽しくて好きになって、高校受験と同時に教室を辞めてからもずっと続けていること。父親からは音楽を止めて学業に励むよう言われたこと。もつと学力の高い高校にも行けたけど、親の意向で音ノ木坂に来たこと。

まさに私の半生を簡潔に凜に語った。途中で寝落ちするだろうなと踏んでいたものの、凜は最後まで真剣に聞いてくれて、少し嬉しくなる。

「そして未練がましく音楽室でピアノを弾き語っている時に穂乃果に見つかって、個人的にも色々あって、sに加入したのよ。ま、凜と花陽と仲良くなるきっかけにもなったし、結果オーライだと思っっているわ」

一呼吸おいて、私はこう続けた。

「もちろん私を受け入れてくれた凜と花陽には感謝してる」

「感謝だなんてそんな、凜たちは大したことしてないにや」

「大したことしてるのよ。私みたいな、話しかけるなオーラを出している人間にも気さくに話しかけられる人なんて、そうそういないだから」

面と向かって感謝され恥ずかしいからなのか、凜はうつ伏せになり私の枕に顔を埋めた。そんな私は今、部屋のクッションを枕代わりにしている。うつ伏せになったまま身動きをしなくなった凜だけど、私は敢えて何も行動を起こさなかった。凜が自発的に語り出すのを、静寂の訪れた部屋の中で静かに待つ。

「……幼稚園の時にね、凜はかよちんと出会ったの」

彼女の、本当の彼女の、物語。

「きっかけはよく覚えていないけど、気付いたらそばにいたんだ」

思い出しているのか、はたまた言い辛いのか、凜の口から一言一言がゆっくりと出てくる。

「かよちんはあまり外で遊びたがらなかったけど、凜は身体を動かすことが好きだった。まあそれは今も変わらないんだけど、とにかく中でも外でも走り回っていた」

容易に想像できるその姿に、私の口角は自然と上がる。

「幼稚園の頃はスモックがあったけど、小学校にあがると特に指定もなかったから、自然と動きやすい格好をするようになった」

「……それが『男の子らしい格好』ってことね」

「うん。スカートだと引つ掛けちゃったりするからね。……でも

ね、ある日思い立ってスカートを履いて学校に行ったの」

ああ、花陽が話していたあの話かと、私は内心で理解した。そういえば凜は、私が既に知っているといるということ知らなかったわね。

凜が変化を迎えた日から少し前、二年生組が修学旅行に行っていた期間の帰り道での出来事。あの日の凜は、自分に向けられた期待に耐えられなくなっていた。そして私たちの凜に対する評価を頑なに拒み、自分を下げて相手を上げることに躍起になっていた。

「登校中に会った男の子たちにさ、案の定笑われちゃったよ。指をさされて、馬鹿にするように通り過ぎて行った」

「小学校は変化に敏感だからね。凜がいつもと違う格好をしてるから、反応せずにはいられなかったのよ」

男の子とよく遊んでいた凜なら特にそう。その男の子たちには、気になる子は苛めたくなくなるといった気持ちも少なからずあったはず。異性を気にし始める小学生なら特段珍しいことでもない。

「今の凜でも、そうなんだろうなとは思うよ。けど、その時の凜には重い出来事だった。自分の姿が恥ずかしくなって、人の目が気になって、世界のみんなに笑われているように思えて、かよちんを置いて家に逃げ帰ったの」

逃げ帰る。

凜があえてこの表現を選んだのには理由があるように思えた。僅かにだけど、本当の凜への緒が見える。私は凜に先を促す。

「自分の部屋で鏡を見てさ、凜、驚いちゃった。真っ赤に泣き腫らした目と、くっしやくしやな顔をした子が、スカートを履いて立っているの」

凜は矢継ぎ早に自虐の言葉を並べていく。

「全然似合ってもないのに、全然可愛くもないのに、それこそ横にいたかよちんのほうがかわいいのに、凜はなんでこんな格好してるんだろうって。それから私は私服でスカートを履くことはなくなった」

「……………」

当時の凜の心境を考えると、直ぐには言葉が出てこなかった。喉から胸にかけて、かあつと熱くなってくるのがわかる。自分の抱えてい

た不安と、それが顕著に表れてしまった鏡の中の自分。一人で悩み、一人で傷付いた凜は、その鏡の中に何かを閉じ込めた。いや、凜の言葉借りるなら、鏡の中に『逃げた』のほうか正しいのかも。

「……なるほど、ね」

また部屋から声が消えた。きつと今まで花陽にも話したことがない話を、今私にしている彼女は一体何を考えているのだろう。それは凜だけが知っていて、私の推測でできることではない。

……そろそろ頃合かしらね。これから凜の体に複雑に絡まってしまった糸を、一本一本解いていく。もがくうちに毛糸にくるまってしまった猫を、私が救い出してみせる。

「……凜はさ、花陽に憧れてるんじゃない？」

「……………っ!!」

凜の女の子への憧れというのは何処から来るのかと、以前考えてみたことがある。普通の女の子なら、普通の女の子である限り、普通の女の子であるはず。要領を得ない表現だけど、つまり可愛い服を着て、お洒落に興味を持ち、男の子を気にするというのが女の子としての普通になる。ところが凜は、物心が付いた頃から男の子同然に遊んでいた。一般的に小学校中学年にでもなる頃には、自分と異性との違いを実感し、異性としての道を歩む。凜を取り巻く環境は、それを許さなかった。

後編

花陽という、幼馴染であり親友の女の子がいた。アイドルを目指す、女の子を目指す、ませた女の子がいた。自分の全く知らない世界に憧れを持つ、大人びた女の子がいた。自分が男の子の遊びをしている間に、花陽は女の子として一つ先を行く……いや、正負真逆を向く彼女たちの差は大きかった。花陽に誘われ一緒になってアイドルの映像を見るたびに、自分と花陽の違いを臆げながらも理解していた。

「そして凜は、花陽のファンでもある。いわゆるファン第一号ってどこかしら？」

「……よく知ってるね。そうだよ。凜はかよちんの親友でもあり、ファンでもあるの」

女の子がスカートを履くことは、当然であり不思議な話ではない。しかし凜にとっては特別な話だった。それは普段しない格好だからではなく、花陽への憧れとして、花陽というアイドルへの憧れとして、そして女の子への憧れとして、あくまで真似事のようにスカートを履いたのだろう。さながら年頃の女の子が、アイドルの髪型やメイクを真似するかのよう。それ故に、男の子に笑われたというシヨックは大きかったはず。

「かよちゃんは凄いなだよ？ アイドルへの情熱っていうのかな、自分を可愛くするだけじゃなくて、それこそ研究熱心なんだ」

花陽を自慢する凜の顔は、とても嬉しそうで、そして寂しそうだ。「同じDVDを何度も見たり、シヨップにも凜を引っ張って行ったり。だからにこちゃんに出会えたのは本当に良かったんじゃないかな？」

凜はいつでも花陽を凄いという。花陽も凜をよく褒めることから、それは一見お互い様のように見えるが、凜のそれには憧れを孕んだ応援の意味が強い。

そう、凜にとっては花陽が中心であり、地球であり、大地であり、凜自身は周りから包み込む小さな星の一つなのだ。舞台に立つアイドル

ルを応援する為に揺れる、黄色いサイリウムの一つ。

そして凜はよくこう口にする。自分には似合わないから、端っこだから、みんなと一緒だから。

自分に自信のない言葉のように聞こえるが、今となっては違うように捉えられる。

花陽が一番似合うから——、花陽が目立つように——、花陽と一緒にだから——。

「でも花陽が、sに入るときは、凜が引つ張っていたじゃない」

「あれは……、かよちゃんがアイドルになる為の折角のチャンスだったから」

「まるで花陽のプロデューサーみたいね」

「あはは……。凜はかよちゃんの親友でファンでプロデューサーなんだね」

凜と真姫の視線が交差する。涙こそ流してはいないものの、伏し目がちな凜のその瞳は、たまに見せる潤んだ瞳よりも泣いているように見えた。そしてその裏にある意志を、真姫は明確に読み取ることができた。

「凜は将来何になりたいの?」

「将来? うーん、なんだろ。それこそかよちゃんのプロデューサーかな? マネージャーさんでもいいかも!」

「……………違うでしょ?」

「……………えっ?」

「違う。凜の在るべき姿はプロデューサーやマネージャーなんかじゃない……」

どうして苛立ちが起こっているのか、今の真姫には理解できていないが、その語調は自然と強くなっていく。

「凜は、女の子になりたいんじゃないの?」

「突然どうしたの? 真姫ちゃん」

凜の眼が猫のようにまん丸になる。その顔は驚いているようで、しかし質問の意図を理解しているようでもある。

「凜は、アイドルになりたいんじゃないの?」

「いや……そんなはずが……。凜はかちゃんに引っ付いて加入しただけで」

おそらくμ、sの誰一人としてまだ誰も気付いていないであろう、凜の加入理由。時折見せる凜の引っ込み思案な行動と、そして花陽の性格から導ける凜の思惑は一つだった。

「凜は……自分を変えたかったのよね？」

「……………」

「別を取って食おうってわけじゃないのよ。ただ凜のことが知りたくなって」

「……………そこまでわかってるんだもん。もう真姫ちゃんは凜のこ
とよく知ってるよ」

「それは違うわね。全部憶測で言ってるだけ。それこそ人の気持ち
を察することなんて、人と接してこなかった私にはできないことだ
わ。だから……凜の口から詳しく聞きたいな」

再び訪れた静寂。普段はさほど気にならないのに、カチリコチリと
置き時計の刻む音が耳にうるさい。真姫は今、ただ凜の声だけに集中
したかった。

「……実は……さ。凜って、あがり症なんだ」

「……へえー、意外ね」

予想もしていなかった単語に、真姫は素直に驚いた。内気な花陽な
らともかく、あの元気な凜本人が自分をあがり症だと言うのだ。

「そうなの。かちゃんにも言ったことないし、たぶん気付いてない
と思う」

「でも凜って陸上部だったんでしょ？ しかもそれなりに大会で結
果を残してたって聞いたわ」

「あまり覚えてないけど、何個か賞は貰ってるね。……その陸上の
引退試合で、自分があがり症だって自覚したんだ——」

真姫は、凜の引退試合での出来事を事細かに聞く。初めて他人の期
待を背負ったことを自覚し、そして期待に添えなかった悔しさで、凜
は自分でも驚くほどに泣いたという。星空凜はただ、本当に走るこ
とが好きだから走るだけなのだろう。勝負事なんて、ましてや他人の視

線なんて二の次。

「そのあがり症を克服するために、μsに入ったの。みんなの前で歌って踊るなんて、相当な勇気がいるんだよ？」

それなら真姫だってそうだった。音楽室でこそそ弾き語りをしてきたような女子が、人前で歌うなんて。その上、素人がアイドルの真似事をしてダンスをしてみせるのだから、人によっては真姫たちを見ているだけで恥ずかしい気持ちになるだろう。

「……………」

真姫は凜の話のどこかに引つかかっていた。あがり症と言うわりには、ファーストライブから今まで、大きな失敗した凜を一度も見ることがない。本人が言うのだからあがり症なのは間違いないのだろうけど、しかしそのまま陸上を続けていても克服には繋がるはず。つまり……………

「……………それで？ 建前を話したところで、本当の理由を聞きたいわね。凜の本当の目的」

「まったく……………真姫ちゃんには敵わないな」

真姫にそう言われることはまるでわかってたかのような口調で凜は言う。はなから全てを話すつもりでいたようだ。

「本当の、凜がμsに加入した本当の理由は、かよちんを越えるためなの」

唯一無二の親友である、花陽を越える。

「……………アイドルを目指す花陽を越えることで、自分がより女の子に近づけると思ったのね」

「かよちんは逃げない子だった。自分のできないことだって知ってても、絶対に逃げなかった。例えばアイドルだって、上手く踊れないってわかった後でも、さっき言ったようにDVDとかで研究することで、できることを見つけていった」

お世辞にも踊りが上手いとは言えない花陽。それはおそらく小学生の頃にでも本人が自覚していただろう。アイドルにとって踊れないことは致命的と言える。しかし花陽は別の手段を取ることで、アイドルになりたいという夢を追い続けたのだ。

「そして凜も、周りの女の子と自分が違うことはわかってた。でもね、あの日以来、凜は逃げたの。女の子になるっていう夢から」

「……私だって、たまたまピアノが自分に合ったから続けているだけで、途中で限界を感じていたならそこで辞めていたはずよ。……まあ、例え辞めたくてもやめられない立場だったけどね」

慰めにもならない話しかできない自分を、真姫は悔しく思う。しかし真姫の中で、今の凜の言葉ではつきりしたことが一つあった。

男の子たちに弄られ家に帰った時にも使った『逃げる』という表現。これは花陽と凜自身を比べた結果に出てきたもの。

『逃げない』強さを持つ花陽に対し、『逃げる』選択肢を取った凜の抱えるコンプレックスは、もはや言うまでもない。

「どこかで納得したつもりだった。もう諦めていたつもりだった。でも、音乃木坂に入学して、かよちゃんがμ'sに興味を持ち出して、また引っかかっちゃって」

「それで陸上部を蹴ってまで、花陽の側で、花陽を越えることにしたのね」

「……ははっ。なんか、気持ち悪いよね、凜って」

そう言っただけ凜は自虐した。どこか狂気じみても見える凜の花陽に対する執着心というものは、もはや周りの人たちの尺度で測ること自体が間違っている。彼女たちが築いてきた関係というものは、ただの幼馴染で片づく話ではない。

「同じ土俵で戦おうとすることに、何の気持ち悪さがあるっていうのよ。μ'sに入ることが花陽にとってアイドルになる最善手と言うなら、それは凜にとって女の子になる最善手とも言っていないんじゃない？ それに……」

悪戯っぽく笑って、真姫は凜の頬をつねる。

「入学してから毎日のようにぼっちでピアノを弾き語ってた私に、勝る気持ち悪さがありました?」

「……うえー。まひひゃん、痛いにやー」

ようやく凜の語尾がいつも通りに戻った。真姫が少し冗談を言ったことで落ち着いたのだろう。

「凜に足りないものは自分の持つ魅力に対する自信だけよ。凜はそこいらの女の子よりかは格段に可愛いんだから、凜が否定し続けるなら私が肯定し続けるわ」

「真姫ちゃん……」

凜の持つ闇は深い。自分が何かを言ったところで変えられるものは何もないのだと、真姫は自覚した。せめて真姫ができることは、凜という曖昧な存在を肯定することと、もう一つ。

「よーっし。凜、今すぐ服を脱ぎなさい。私の服で、凜が可愛いことを改めて自覚させてあげる！」

真姫は布団を蹴り飛ばした。突然肌に触れる寒気に、凜は体を丸くする。聞き方によっては勘違いされかねない発言をした真姫は、無言でガタガタとクローゼットを漁る。しばらく黙って眺めていた凜は、何か吹っ切れたように指示通りに動いた。

「——ほら、やっぱりこれとかよく似合ってるじゃない」

真姫が凜に着せたのは、至ってシンプルにワンピースだった。真姫が中学生の頃に少し着ただけというそのワンピースは、凜らしい薄い黄色のシフォン生地をしている。恥ずかしそうにスカートの端を掴む凜をシヤンと立たせた真姫は、凜の両肩に手を置いて鏡を覗き込んだ。

「凜は難しく考えるより、これくらい単純でいるほうが似合ってる。変に着飾ろうとしないで、ありのままに生きなさい。元気にはしゃぎ回る、そんな凜が私は好きよ」

真姫は凜から少し離れ、鏡には凜だけが映るようにした。

「……私にできることは、凜を可愛く見せるためにお手伝いするだけ。衣装はことりに任せるとして、私服は私に任せなさいね」

恐る恐る鏡の中の自分を見ていた凜は、その場でくるりと回る。

「……かわいい」

凜の口からその言葉が漏れた。

「……っー」

華奢な脚を見せているスカートをひらつかせながら、控えめにくるくる回る凜を見て、真姫は少しときめいた。普段からは考えられない

大人しさを見せる凜は、しかしいつもの凜よりも魅力的に見える。まるで、凜自身がそう望んでいたかのように。

「……ふふっ」

「にやつ！ やっぱり凜、可笑しいかにゃ?!」

「いいえ、違うわ。凜のことをよく知れて嬉しいのよ。……そうだ、今度一曲書いてあげる。元気いっぱい凜のイメージソング」

そう言いだした真姫には、既に曲のイメージができあがっていた。あとは海未と相談して形にするだけのところまで構成は固まっている。スクールアイドルとしての、いや、アイドルとしての、はじめの一步となるような曲。

「ほんとにほんとに?! どんな曲になるの?」

「そうね、詳しくは秘密だけど、コンセプトは『女の子初心者』よ」

「あー! また凜のこと女の子初心者って言ったー!」

「うふふ、馬鹿にしているわけじゃないわ。……さあ、残りの試着はもう明日にして寝ちやいましてよ」

「よーっし! じゃあ、真姫ちゃん、寝るにゃー!」

・
・
・

『星空凜は猫を被りたい』